

令和 2 年 9 月 14 日現在

機関番号：31307

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13266

研究課題名(和文)日本人英語学習者が不得手な目的格関係代名詞と関連構文の指導法開発

研究課題名(英文) Teaching Object Relative Clauses and their Related Constructions: Contribution of Theoretical Linguistics to English Pedagogy

研究代表者

遊佐 典昭 (YUSA, Noriaki)

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：40182670

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：(1) 日本人英語学習者が目的語関係節を正確に用いる際に重要な「フィラーと空所の依存関係」をリアルタイムで構築するためには、介在要素である主語位置に語彙的に限定されていない名詞句、例えば、代名詞を用いて、フィラーと空所依存関係構築の基礎を固めることの重要性を指摘した。(2) 日本人英語学習者に理解が難しい英語の主語繰り上げ構文は、主節主語の派生の方法が英語母語話者とは異なり、母語である日本語の影響で主節主語を基底生成する。(3) 外国語(日本手話)の学習で、人間を介して学ぶ場合とDVDで学ぶ場合とでは脳機能に与える影響が異なり、言語入力における質の重要性が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本人英語学習者は、目的語関係代名詞の知識があっても、リアルタイムで言語を処理する必要のある産出・理解の場面では、関係節の使用を避けるか、使用したとしても正確さが欠ける。この問題を解決するために、本研究は、目的語関係節内の主語に代名詞を用いて言語処理の負荷を軽減する指導案を提案した。この提案は、目的語関係節の有効な指導案が存在しない英語教育において、大きな社会的意義を有していると思われる。また、外国語の学習で、人を介して双方向で学ぶ場合とDVDのように一方通行の教材で学ぶ場合とでは、学習後の脳活動に差が出るという研究成果は、遠隔授業の有効性を考えるうえで学術的かつ社会的意義は大きい。

研究成果の概要(英文)：We have obtained three results from this study: (1) We insist, adopting the insights from L1 processing research based on a featural Relativized Minimality, that intervention is also a key factor influencing L2 learners' processing difficulties of object relative clauses (ORCs). To reduce the difficulties, we propose that in the early stage of teaching ORCs, the subject of the embedded relative clause should be a pronoun, not a lexically restricted NP often used in ESL textbooks; (2) Japanese learners of English rely more on L1 transfer than on locality (intervention) in the construal of reflexives in English raising constructions; (3) Our fMRI data show that a human being's presence in learning L2 syntax caused functional changes in Broca's area but DVD-based learning did not, indicating that the quality of linguistic input matters in L2 acquisition. The result implies that learning L2 in a richer social context may well lead to closer native-like attainment of L2 processing.

研究分野：言語学

キーワード：目的格関係代名詞 介在効果 繰り上げ構文 DVD 社会性 目的語関係節 代名詞

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

日本語を母語とする日本人英語学習者にとって、英語の関係代名詞は習得することも、教師が教えることも困難な構文の一つであると言われ、そのために多くの研究がなされてきた(橋本・横川(2014)などを参照のこと)。そもそも、日本人英語学習者は関係節を避ける傾向があり、関係節を用いずに2つの文で表現してしまいがちだという Schachter (1974)の観察はあったものの、だからと言って関係代名詞の指導法は大きく変化していない。つまり、日本人英語学習者は、筆記試験では関係代名詞の知識があったとしても、リアルタイムで言語を処理しなければならない産出・理解の場面では、関係節の使用を避けるか、使用したとしても正確さが欠けた使い方をすることが報告されている。特に目的語関係節は、日本人英語学習を対象とした文処理研究からも、困難であることが報告されている。このような状況があるにもかかわらず、目的語関係節の学習・指導法は国内外で確立されていない。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の三つである。(A) 目的語関係節の産出・理解の困難さをもたらす要因を解明し、それにもとづき指導法の開発をする。(B) 目的語関係節の困難さの原因として介在効果が指摘されているので、介在効果が関与する構文が日本人英語学習者に引き起こす問題を解明する。(C) 文法・構文を指導するさいに、どのような言語入力が学習に影響を及ぼすのかを、指導者との相互作用という社会性の観点から考察する。

(A) に関しては、母語話者を対象とした文処理研究から、(1b)の目的語関係代名詞は、(1a)の主語関係代名詞よりも、理解が不正確になったり、読解時間が遅くなったりすることが明らかになっている。

- (1) a. The reporter [that \_\_\_\_ attacked the senator] disliked the editor.  
b. The reporter [that the senator attacked \_\_\_\_] disliked the editor.

これは、文法知識を処理(統語処理)するときの複雑さが関連していると想定されている。例えば、(1)を統語処理するには、the reporter を disliked と関連づけ、主語・述語関係を構築する必要がある。さらに、埋語 (filler)である the reporter を下線部の空所 (gap)と結びつけ、埋語・空所依存関係 (filler-gap dependency)を確立する必要がある。この際に、埋語と空所の「距離が長い」(1b)が、(1a)よりも、埋語と空所を結びつけるときに処理が高まることが報告されている (Gibson 1999)。日本人英語学習者を含め第二言語学習者にとって、目的語関係節が主語関係節よりも、文理解・産出が困難であることが多くの文献で指摘されているにもかかわらず、目的語関係節の学習・指導法は国内外で確立されていない。最近の言語獲得研究や文処理研究の研究結果から、本研究は、日本人英語学習者が目的語関係節を文産出や文理解で使えるようになるための指導案を提案することを目的とする。

(B)に関しては、(2a)に見られる主語繰り上げ構文(subject raising construction)を取り上げる。

- (2) a. John seems to Mary to be smart.  
b. John seems to Mary [~~John~~ to be smart]

この構文では、(2b)のように、主節文の主語である John と元位置に残されたコピー (John) との間に経験者句である Mary が生じている場合に、目的語関係節内の主語同様に「介在効果 (intervention effect)」を生み出す。この構文は、英語母語話者の子どもには難しいことが報告されている (Hirsh and Wexler 2007, Choe and Deen 2016)。また第二言語使用者を対象とした研究でも同様に、困難であることが指摘されている (Choe 2015, Yoshimura et al. 2016, 2018)。本研究は、日本人英語使用者を対象として、主語繰り上げ構文の困難さの原因を探る。

(C)に関しては、外国語指導においてどのような入力が適切であるのかを探る基礎研究として、社会性の役割に関する論文を執筆することを目的とする。この研究は、部分的には挑戦的萌芽研究 (課題番号 25580133) の展開であるが、本科研全体の研究成果を含む。

### 3. 研究の方法

本研究の研究体制は、生成文法、第二言語獲得、認知脳科学を専門とする遊佐と、認知脳科学、統計学を専門とする金からなり、遊佐の研究統括のもと、日常的に活発な議論や共同の研究発表を行うことで、研究目標を達成することに努めた。具体的な研究方法は以下の通りである。

- (A) 目的語関係節が主語関係節よりも理解が困難になる原因を、母語を対象とした言語処理研究をもとに、日本人英語学習者にあてはめて実験を行う。その結果にもとづき、目的語関係節の学習・指導法を提案する。  
(B) 主語繰り上げ構文の言語理解実験を、日本人英語使用者を対象として行い、研究成果をまとめる。  
(C) 言語入力に関しての文献調査を行うと同時に、入力に関する実験の論文をまとめる。

### 4. 研究成果

本研究では以下の成果が得られた。

(A) 第二言語や外国語使用においても、袋小路効果 (garden-path effect) が広く観察されていることから、第二言語・外国語の理解でも漸増的処理 (incremental processing) が行われていると思われる。人間の文処理に関する認知システムは限られた情報しか処理できないために、一つ一つ順番に入力されてくる単語を逐次的に処理する漸増的処理においては、既出の単語を一時的に短期記憶に蓄える必要がある。その後、フィラーと空所の依存関係のような文法的依存関係を構築する際に、短期記憶から既出の要素を探し出す必要がある。上記 (1b) の目的語関係節では、短期記憶に、順次 the reporter, that, the senator を保持する。その後、他動詞 criticized が入力された時に、フィラーの the reporter と空所の依存関係を構築するために短期記憶を検索する必要がある。その際に、the reporter と形態的に類似している the senator が、the reporter と空所の間に介在しているために the reporter の検索が困難となり、言語処理の困難を引き起こす。短期記憶の中にこのような類似した要素が多数存在すると、情報の検索に時間がかかり取り出しが困難になる現象は「類似性に基づく干渉 (similarity-based interference)」と呼ばれている。

ここで、短期記憶が十分に発達した大人の第二言語使用者でも、目的語関係節の処理が困難であることから、「外国語副作用 (foreign language side effect)」(Takano and Noda (1995)) の可能性を指摘した。外国語副作用とは、外国語を使用しているときに一時的に思考力が低下するという現象である。外国語を使用するときには多くの処理資源 (processing resource) が使われるために、利用できる残りの資源が少なくなる。その結果、第二言語使用者は、母語話者以上に短期記憶からの要素の引き出しが困難となり、目的語関係節を避ける傾向が強くなると想定される。

また第二言語使用者は、(3b) の目的語関係節の意味を伝えるのに、(3b) のように受動文を含んだ主語関係節を用いることがあることを明らかにした。

- (3) a. The reporter that the senator criticized \_\_\_ disliked the editor  
b. The reporter that \_\_\_ was criticized by the senator disliked the editor.

これは、第二言語使用者が、短期記憶からの要素の引き出しが容易な主語関係節を使ったためであると解釈できる。

本研究では、学習者が目的語関係節を正確に用いる際に重要な「フィラーと空所の依存関係」をリアルタイムで構築するためには、介在要素である主語位置に語彙的に限定されていない名詞句、例えば、(4b) のように代名詞を用いて、フィラーと空所依存関係構築の基礎を固めることの重要性を指摘した。

- (4) a. The reporter [that the senator criticized \_\_\_] disliked the editor.  
b. The reporter [that you criticized \_\_\_] disliked the editor.

コーパスデータによると、(4b) のように目的語関係節内の主語に代名詞が現れる頻度は主語関係節よりも高く、目的語関係節の処理が容易になることが報告されている (Reali and Christiansen (2007))。この文処理研究の結果は、本研究の代名詞が介在効果を生み出さないことと一致する。また、Roland et al. (2007) は、目的語関係節が持つ談話機能をコーパスから調査し、目的語関係節内の主語はほとんどが旧情報であることから、関係節の前に、その代名詞がトピックとなるような文脈を与えることが重要であることを指摘している。研究成果は、遊佐 (2019) 「目的語関係節の指導演-言語理論・言語獲得・文処理研究の観点から-」として、野村忠央他編『学問的知見を英語教育に活かす』に掲載された。

目的語関係節内における主語代名詞が、第二言語においても目的語関係節の言語処理負担を軽減するという本研究の主張は、Choe and Deen (2020) の韓国人母語話者の英語理解の研究結果からもうらづけられる。このことは、目的語関係節の指導演において、主語代名詞を使用することの有効性を支持するものである。

(B) 経験者句が含む主語繰り上げ構文のむずかしさの要因として、経験者句の介在効果、あるいは母語からの転移が想定されるが、要因を特定するために日本人大学生を対象として主語繰り上げ構文における再帰代名詞の理解実験を行った。実験結果から判明したことは、(i) 主語繰り上げ構文は日本人大学生にとって困難であること、(ii) 主節主語を A 移動ではなく、表層位置に基底生成すること、(iii) 原因として seem, appear に対応する動詞が日本語に存在しないために (竹沢 2015)、母語である日本語の影響で表層主語を基底生成することが明らかになった。この研究は、吉村紀子、中山峰治、藤森敦之との共同研究の成果の一部であり、学会発表ならび論文を発表した。

(C) 言語入力に関する基礎研究として、日本手話を外国語として学ぶ場合の社会性の役割に関する論文 “Social interaction affects neural outcomes of sign language learning as a foreign language in adults” を執筆し、国際オープンアクセスジャーナル *Frontiers in Human Neuroscience* に掲載された。以下の説明は、遊佐・杉崎・小野 (2019) を再録したものである。実験に参加したのは日本人聴者 (大学生) で、聾者である教員との相互作用を通して日本手話を学習している実験群 (LIVE 群) と、その学習を撮影した DVD を見ながら日本手話を学習した実

験群 (DVD 群) である。従って、両グループの相違点は、教員との相互作用があるか否かの「社会性」の有無である。学習後の結果を見ると、両実験群とも誤答率が大きく減少した。このことは、両群とも手話を学習したことを示している。ところが、脳機能計測で両群に差が見られた。LIVE 群のみが教授後、手話を理解している時にブローカ野に新しい賦活が生じ、脳の機能変化を起こしていた。ブローカ野は、統語処理に関与し、統語知識の定着にも関与していることが明らかになっている (Sakai et al. (2009)、Yusa et al. (2011))。本実験の結果は、母語獲得のみならず、大人の外国語学習においても、「他人との相互作用」を通してのみ統語に関わる脳部位の活動の変化を伴う学習が可能であることを示唆している。一方、DVD 群は、右頭頂連合野の賦活が見られた。これは、Jeong et al. (2010)において、ビデオクリップを見て文字を学習した群の結果と一致する。右頭頂連合野は、人間のミラーニューロンシステムの一部を構成すると考えられているので (Jeong et al. (2010))、DVD 群は、模倣学習で日本手話を学習したと考えられる。本実験は、外国語の統語規則を学ぶ場合でも、人を介して外国語を学んだ場合と、DVD のような一方通行の教材を用いた場合では、脳活動に相違が生じることを明らかにした。このことは、第二言語獲得においては、入力量だけでなく質も重要であることを示唆している。

上記の研究成果に加えて、言語入力の質と頻度が脳内言語に与える影響に関する論文“Input effects on the development of I-language in L2 acquisition”が、バイリンガルの国際学術誌 *Linguistic Approaches to Bilingualism* に掲載された。この論文では、使用基盤モデルと生成文法を統合することを試みている Yang (2018)の問題点を指摘し、言語入力の質の重要性を述べた。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計9件（うち査読付論文 8件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Yoshimura Noriko, Nakayama Mineharu, Fujimori Atsushi, Yusa Noriaki	4. 巻 21
2. 論文標題 Syntactic Knowledge and Context Sensitivity: Evidence from Japanese EFL Learners on the Processing of Raising Constructions in English	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 JSLs 2019 Conference Handbook	6. 最初と最後の頁 103-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yoshimura Noriko, Nakayama Mineharu, Fujimori Atsushi, Yusa Noriaki	4. 巻 26
2. 論文標題 L1 Transfer and Locality in Reflexive Resolution in L2 Raising Constructions	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Ars Linguistica	6. 最初と最後の頁 65-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Umeda Mari, Snape Neal, Yusa Noriaki, Wiltshier John	4. 巻 23
2. 論文標題 The long-term effect of explicit instruction on learners' knowledge on English articles (2017のOnline First論文の印刷版)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Language Teaching Research	6. 最初と最後の頁 179 ~ 199
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.1177/1362168817739648">https://doi.org/10.1177/1362168817739648</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yusa Noriaki	4. 巻 8
2. 論文標題 Input effects on the development of L1-language in L2 acquisition	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Linguistic Approaches to Bilingualism	6. 最初と最後の頁 792 ~ 796
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) <a href="https://doi.org/10.1075/lab.18081.yus">https://doi.org/10.1075/lab.18081.yus</a>	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koizumi Masatoshi, Kim Jungho	4. 巻 24
2. 論文標題 Which Factor Primarily Modulates Cortical Activation During Sentence Processing: Case Marking, Thematic Role, or Grammatical Function?	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Japanese/Korean Linguistics	6. 最初と最後の頁 245-258
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Yusa Noriaki, Kim Jungho, Koizumi Masatoshi, Sugiura Motoaki, Kawashima Ryuta	4. 巻 11
2. 論文標題 Social Interaction Affects Neural Outcomes of Sign Language Learning As a Foreign Language in Adults	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Frontiers in Human Neuroscience	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fnhum.2017.00115	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kiyama Sachik, Sun Men, , Kim Jungho, Tamaoka Katsuo, Koizumi Masatoshi	4. 巻 75
2. 論文標題 Interference of context and bilinguality with the word order preference in Kaqchikel reversible sentences	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Tohoku Psychologica Folia	6. 最初と最後の頁 22-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Koizumi Masatoshi, Kim Jungho	4. 巻 7/1541
2. 論文標題 Greater Left Inferior Frontal Activation for SVO than VOS during Sentence Comprehension in Kaqchikel	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Frontiers in Psychology	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3389/fpsyg.2016.01541	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Neal Snape, Mari Umeda, John Wiltshier, Noriaki Yusa	4. 巻 -
2. 論文標題 Teaching the Complexities of English Article Use and Choice to L2 learners	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 GASLA 13: Proceedings of the 13th Generative Approaches to Second Language Acquisition Conference	6. 最初と最後の頁 208-222
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 10件)

1. 発表者名 Yoshimura Noriko, Nakayama Mineharu, Fujimori Atsushi, Yusa Noriaki
2. 発表標題 Syntactic Knowledge and Context Sensitivity: Evidence from Japanese EFL Learners on the Processing of Raising Constructions in English
3. 学会等名 The Japanese Society for Language Sciences (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yoshimura Noriko, Nakayama Mineharu, Fujimori Atsushi, Yusa Noriaki
2. 発表標題 L1 transfer and locality in reflexive resolution in L2 raising constructions
3. 学会等名 14th Generative Approaches to Language Acquisition (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noriko Yoshimura, Mineharu Nakayama, Atsushi Fujimori and Noriaki Yusa
2. 発表標題 Is a gender distinction helpful for Japanese EFL learners in comprehending raising constructions?
3. 学会等名 The 15th Generative Approaches to Second Language Acquisition (GASLA) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Noriaki Yusa
2. 発表標題 Intervention Effects in Object Relative Clauses: Implications for Teaching Object Relative Clauses
3. 学会等名 17th Annual Hawaii International Conferences on Arts and Humanities (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Mayuko Yusa, Zhiguo Xie, Noriaki Yusa, Mineharu Nakayama
2. 発表標題 Acquisition of Japanese null arguments by second language learners
3. 学会等名 8th Generative Approaches to Language Acquisition-North America (GALANA 8) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金情浩
2. 発表標題 外国語の文処理にかかわる脳
3. 学会等名 平成30年度人文学会公開講座、『ことばと脳 - 母語と外国語の理解 - 』（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sachiko Kiyama., Masatoshi Koizumi Masatoshi, Noriaki Yusa
2. 発表標題 Sensitivity to pragmatic markers predicts the degree of autism and depression in older adults: Evidence from sentence-final expressions in Japanese ”
3. 学会等名 日本語用論学会20回大会 (国際学会)
4. 発表年 2017年



1. 発表者名 Noriaki Yusa
2. 発表標題 Comments on Sign Language Learners
3. 学会等名 関西学院大学手話言語センター国際手話フォーラム(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Kim Jungho
2. 発表標題 Language and Brain
3. 学会等名 ワンアジア共同体(招待講演)(国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Ono Hajime, KimJungho, Tang Away, Koizumi Masatoshi
2. 発表標題 VOS preference in Seediq: A sentence comprehension study
3. 学会等名 Austronesian Formal Linguistics Association (AFLA 23)(国際学会)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Umeda Mari, Snape Neal, Yusa Noriaki Wiltshier John
2. 発表標題 Articles in SLA:Effects of positive and negative feedback in the L2 classroom
3. 学会等名 The Pacific Second Language Research Forum(国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計10件

1. 著者名 遊佐典昭・大滝宏一（白畑 知彦、須田孝司（編））	4. 発行年 2020年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 232 (担当 1-29)
3. 書名 第二言語習得研究の波及効果	

1. 著者名 遊佐典昭（西原哲雄、都田青子、中村浩一郎、米倉よう子、田中真一（編））	4. 発行年 2019年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 304 (担当 250-275)
3. 書名 言語におけるインターフェイス	

1. 著者名 遊佐典昭（野村忠央他（編））	4. 発行年 2019年
2. 出版社 金星堂	5. 総ページ数 440(担当 79-94)
3. 書名 学問的知見を英語教育に活かす 理論と実践	

1. 著者名 小泉政利、金情浩、曹永湖	4. 発行年 2019年
2. 出版社 shinasa	5. 総ページ数 196 (担当 145-190)
3. 書名 言語認知脳科学入門	

1. 著者名 遊佐典昭・杉崎鉦司・小野創（遊佐典昭（編））	4. 発行年 2018年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 364 (担当 2-93)
3. 書名 言語の獲得・進化・変化 心理言語学、進化言語学、歴史言語学	

1. 著者名 遊佐典昭（小泉政利（編））	4. 発行年 2016年
2. 出版社 共立出版	5. 総ページ数 360 (担当 163-175)
3. 書名 ここから始める言語学プラス統計分析	

1. 著者名 原口庄輔・中村捷・金子義明(編)	4. 発行年 2016年
2. 出版社 研究社	5. 総ページ数 798
3. 書名 増補版チョムスキー理論事典	

1. 著者名 遊佐典昭（中島平三（編））	4. 発行年 2016年
2. 出版社 朝倉書店	5. 総ページ数 324 (担当 75-85)
3. 書名 言語のおもしろ事典	

1. 著者名 遊佐典昭 (高見健一・行田勇・大野英樹 (編))	4. 発行年 2017年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 240 (担当 226-230)
3. 書名 <不思議>に満ちたことばの世界	

1. 著者名 Koizumi Masatoshi, Yusa Noriaki et al. (Claire Halpert, Hadas Kotek and Coppe van Urk (eds.))	4. 発行年 2017年
2. 出版社 MITWPL	5. 総ページ数 566 8(担当 83-92)
3. 書名 A Pesky Set: Papers for David Pesetsky	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	金 情浩  (Kim Jungho)  (70513852)	京都女子大学・文学部・准教授    (34305)	